

1 人間と野獣のあいだ

展覧会のはじめに、2人の現代作家の作品を通して、「人間」と「野獣」の関わりや繋がりに思いを巡らせてみましょう。

ロビーでまず皆さんが会えるのは、鴻池朋子（1960-）の作品です。鴻池は、民俗学や考古学、おとぎ話など様々な分野の観点から、人間が「ものをつくること」を問い続けています。視覚だけでなく触覚も通して、自然界と人間界の交わりを感じさせる作品を展示します。

続く展示室の冒頭では、浅井裕介（1981-）の作品をご覧ください。浅井は、人間や動物、植物などあらゆる生き物が繋がり合った、壮大な世界観を生み出しています。浅井の代名詞とも言える土を画材に描いた泥絵に加え、動物の血や皮を用いた作品も展示します。

2人の作品は、未分化で原初的な世界を捉えるための新たな視座を与えてくれるはずです。人間と野獣の関係性や連続性、つまり「あいだ」を改めて見つめ直し、人間の根源に迫っていきましょう。

また本章は、第1章でもあり最終章でもあります。ロビーから展示室までの作品を全て見終わった後に、もう一度この2人の作品と向き合ってみてください。最初に出合った時とは、異なる感覚や考えがあなたの中に芽生えるかもしれません。

2 激しく、荒々しく

「野獣」という言葉には、「野生の獣」のほか、「荒々しい行いをする者」という意味があります。本章では、「荒々しさ」をキーワードに作品を見ていきます。

西洋を中心とした美術史を大まかに捉えると、20 世紀より前は、物語や外の世界を作品の中でいかにリアルに表現するかが重視されてきました。これに対し 20 世紀は、人間の内面や、作品そのものの物質性をどのように表現するかが追究されたと言えます。

1905 年のパリで誕生した「野獣派（フォーヴィスム）」の画家たちは、主観的な感覚を重視し、強烈な色彩と大胆な筆触で描きました。やがて世紀の半ば頃には、アメリカやフランス、日本などの国々で互いに呼応し合いながら、直感や衝動を抽象的に表現する「抽象表現主義」や「アンフォルメル」と呼ばれる美術潮流が生まれます。さらに 1980 年代には、原色を用いた激情的な具象表現が、「新表現主義」として世界各国でほぼ同時に登場しました。

このように、内なるものを外へ、激しく・荒々しく表出しようとする美術の傾向は、20 世紀を通じて繰り返し現れてきました。理性だけでは解釈できない人間の内面、つまり「野獣性」が、美術を介することで表現されてきたと言えるでしょう。本章の作品を通して、人間、そして自分自身の内なる荒々しさに触れてみてください。

3 野生の目

フランスの人類学者クロード・レヴィ＝ストロースの『野生の思考』という著書があります。彼は先住民やその文化に着目し、近代以降の効率や計画を重視する合理主義にとらわれない、人間が本来持っている野生状態の思考方法を導き出しました。

彼の代表的な研究の一つとして、「トーテミズム」の再解釈が挙げられます。「トーテミズム」とは、ある人間の集団（氏族など）が、特定の動植物など自然界の存在（トーテム）と特別な繋がりを持つと考え、その動植物などの名前を自分たちの集団名として用いるような信仰や制度を指します。かつての西洋では、人間と自然を混同する未開人の劣った思考によるものとしてみなされました。しかし、レヴィ＝ストロースは、鋭い観察をもとに見出した動植物の関係を、人間社会における集団間の関係に対応させた合理的な思考として捉えました。さらに彼は、トーテミズムには理性と感性を切り離さない、普遍的な人間の思考が表れていると主張しました。

レヴィ＝ストロースのように、自然や感性に重きを置いて人間の本質に迫ろうとする考え方は、20 世紀の美術家たちにも通じていると言えます。彼らは、先住民の文化や動植物、古代の遺物などに強く惹かれ、そこに宿る自然の豊かさや生命の力強さを感じ取りました。そして、それらを表現に取り入れることで、人間本来のあり方を探ろうとしたのです。本章では、そうした「野生の目」を持つ作家たちをご紹介します。